

【永遠の御国で】

[召天者記念礼拝]

『ヨハネの黙示録』

14章13節

熊谷 徹

2014年11月2日(日)

茅ヶ崎同盟教会礼拝説教

【序】永眠者名簿から；

今日の礼拝は、「召天者記念礼拝」です。既に天に召された人達を偲びながら神を礼拝致します。お手許の「永眠者名簿」には、多くの方々のお名前が記されています。私がこの教会に赴任してから今回が14度目の召天者記念礼拝となりますが、この名簿を見ると、この14年の間に83人の方々が天に召されました。そのうち37名がこの教会の教会員です。とても寂しい限りであります。そして、今年のこの日から今日までの一年の間に召された方が3名おられます。

一人目はK氏。高名な学者で大学教授だった方です。私達夫婦は先生の著作を通して色々なことを教えて頂きました。子供を抱いて本を読み聞かせることの素晴らしさとか「家庭料理はその家の文化である」ということなど…。彼は教会員Mさんのご主人です。

二人目はW氏。TEAM(TheEvangelicalAllianceMission)の宣教師として来日され、当教会創設期に多大のご尽力をいただきました。

三人目はMさん。作家の故M氏の奥様で、教会員Yさんのお母様です。優しくて穏やかな人で、毎年、教会学校の子供たちの為に素敵な小物を作っていました。

今日は、これらの方々を偲びながら、ご遺族や親しい方々と共に、「生と死を支配される全能で全き愛の神、慈しみに富む主」を礼拝したいと思います。この礼拝を通して、私達もいつの日か、この地上に別れを告げる時が来るのだということを覚えましょう。そして、いつか来る「その日」には、「先に召された愛する人達と再会できる！」という信仰と希望を新たに致しましょう。

【1】主イエスの死と復活；

(1)人間の死の中で最も衝撃的な死はイエス・キリストの死です。キリストが十字架に死なれた時、全地が暗くなりました。聖書はこう告げます：「さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。そして、三時に、イエスは大声で、『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは訳すと『わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか』という意味である。」(マルコ 15:33-34)。

キリストがまさに死のうとしていたその時、「全地が暗くなった」ということ、即ち、「全地が闇に覆われた」ということは象徴的であります。死が私達を支配する時、私達もまた闇に覆われるからです。私達が死に直面する時、私達そのものが闇に覆われるのです。死ぬことへの恐怖と不安が私達を襲います。

愛する人達と引き裂かれることの悲しみと絶望が私達を襲います。死という名の、得体の知れない大きな力に飲み込まれて行くことへの怒りや、人生の空しさが湧き上がり、心は闇に覆われてしまうのです。

私達にとって最も確かな事実は、「いつか必ず死ぬ」ということです。聖書の中にこういう言葉があります；「人も死ぬば獣も死ぬ。あれも死ぬばこれも死ぬ」（伝道 3:19）。こういう言葉もあります；「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある」（伝道 3:1-2）。こう聖書が告げるように、人は皆いつか死ぬのです。「生まれるのに時がある」ように「死ぬのにも時がある」のです。「定めの時」が来れば、人はみな死なねばならないのであります。とても辛く悲しいことですが、それが人の「定め」なのです。

殆ど人は愛する人の死に遭遇します。そして誰もが自分自身の死と向かい合う時がやって来ます。愛する人の死であれ、自分自身の死であれ、いざ死に直面した時に感じることは、死への不安であり、恐怖であり、死ぬことへの怒りであり、別れることの悲しみであったり、絶望なのです。「自分を取り巻く世界が暗闇になってしまった」という思い、「わが神、わが神、なんぞ我を見捨て給いしや！」と叫びたくなる思いに襲われるのです。

どうしてでしょうか？…それは、死がすべての終わりであり、命の破壊であり、滅びであり、罪の裁きだということに、薄々気付いているからです。そして、それこそ、聖書が告げる死の実相であり、真実の姿なのです。聖書はこう告げています；「人には一度死ぬことと死後に裁きを受けることが定まっている。罪の支払う報酬は死である。罪ある死の行き着く先は、滅びである」と（ヘブル 9:27, ローマ 6:23&c）。

人はみな、神の前では罪人です。罪人だから、罪の裁きとしての死を免れることはできないということ、うすうす感じているのです。それだから、死に触れたり死を垣間見るだけで、滅びを感じたり、不安に陥ったり、人生の空しさを覚えてしまうのです。キリストが十字架の上で叫んだ、「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか！」という叫びは、実は私達が発すべき叫びだったのです。キリストは、私達が叫ぶべき叫びを、私達に代わって叫んで下さったのです。

(2)しかし、キリストの十字架の叫びは、絶望で終わったものではありません。あの叫びは、新しい命へ向けての叫びでもあったのです。キリストは、十字架の上で、私達の罪を一身に背負い、私達の罪に対する裁きをすべて引き受けて下さいました。主イエスは、十字架に於いて、死とその意味する罪と裁き、闇と滅びとを一身に引き受けて下さったのです。その時、キリストは私達の罪をすべてその身に負って、私達に代わって罪の裁きを受けて下さり、私達に代わって「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか」と叫ばれ、私達に代わって滅ぶべき罪人としての死を死んで下さったのです！…そのことによって、私達は、すべての罪を赦され、滅びから救われ、神の無限の愛と赦しを受けられるのです。

それだけではありません。キリストは、十字架の死から三日目の朝、墓からよみがえったのです。その日の朝、墓に行った女達が見たのはカラになった墓とまばゆい姿の天使達でした。天使達は、空になった墓を見て恐れに震えている女たちにこう告げました；「ここにはおられません。よみがえられたのです」(ルカ 24:6)。キリストは「よみがえられたのです」。私達の罪のゆえに十字架に死なれたキリストは、私達を縛り付けていた「死」そのものを打ち破り、新しい命・朽ちることのない命に復活なされたのです。

キリストが死を打ち破り復活したが故に、死はもはや「終わり」ではなくなりませんでした。死を滅ぼしたキリストのゆえに、死はもはや「絶望」でも「滅び」でもなくなったのです。キリストが復活したことによって、死は「新しい命への旅立ち」となり、「復活の命への門出」となったのです。「キリストにあって死ぬ人」にとって、死はもはや呪いでもなく、滅びでもなく、終わりでもなく、絶望でもなくなったのであります。

【2】主にあって死ぬことの幸い(黙示録14章13節)；

(1)十字架に死んだキリストは、死を打ち破って復活しました。そのキリストに繋がっている人は、キリストの復活の力に与り、新しい命に復活することができます。そういう人について、『ヨハネの黙示録』14章13節はこのように告げています；「また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」」

(1) 黙示録14章13節a;

「主にあつて死ぬ死者は幸いである」と聖書は告げます。「主」とは「救い主キリスト」のことです。また、「主にあつて(en kurio)」という言葉は聖書独特の表現で直訳は「主のうちに」とか「主の中に」であります。英語で言えば、「in the Lord」です。そして、「主のうちにある」或いは「主の中にいる」とは「主に包まれて」或いは「主に結ばれて」(新共同訳)ということです。

「幸いなるかな、死者達(makaroi oi' nekroi)」とこの聖句は言いますが、「死ぬ」のになぜ「幸いなるかな」と言えるのでしょうか？それは、救い主の無限の愛に包まれて死ぬから；永遠の主の永遠の愛に包まれて死ぬから；「永遠の命を得て」(ヨハネ 3:16) 魂の故郷である永遠の御国に帰って行くから；だから「幸い」なのです。「主にあつて死ぬ人」にとって、死は終わりでも滅びでも絶望でもない；…だから「幸い」なのです。「主にあつて死ぬ人」にとって、死は、終わりではなく、永遠の命の世界への旅立ちなのです。「主にあつて死んだ人」は、「主にあつて」；主に結ばれて；主の胸に抱かれて、愛なる神の国へ；「もはや、死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない」(黙示 21:4)「永遠の御国」へ旅立って行く；…だから「幸い」なのです。

(2) 黙示14:13b.

次に、13節後半に、「然り。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる」と記されています。

「労苦(kopos)」というギリシャ語は、古代社会の奴隷が味わったような「困難や苦しみを伴う激しい労働」を意味します。避けたいけれども避けられない苦しみ・試練・患難、深い悲しみや嘆き痛み、それがここでいう「労苦」です。

キリストは、「あなた方は世にあつては患難がある。しかし勇敢でありなさい！」と仰いました(ヨハネ 16:33)。キリストが仰るように、「世にあつては患難がある」のです。苦しみがあり、悩みがあり、試練があるのです。この世に生きている限り、私達には様々な「患難」があり沢山の「労苦」があるのです。

例えば、肉体的な「患難や労苦」があります。精神的な「患難や労苦」もあります。その他にも様々な「患難や労苦」があります。この世は「労苦」と「患難」に満ち溢れています。「だが！」と聖書は告げるのです；「彼らはその労苦から解き放されて休むことができる」と。「主にあつて死ぬ人達」は、「労苦から解き放されて」永遠の「休みに入ることができる」と言っているのです。

「主にあつて死ぬ人達」は地上の「労苦から解き放されて」、永遠の御国で

「休むことができる」のです。彼らは、主の永遠無限の愛に包まれて「永遠の御国」へ旅立って行きます。そして「永遠の御国」では、「神ご自身が、彼らの目の涙をすっかり拭い取って下さる」のです。「永遠の御国で」、主の愛と慈しみに包まれて、永遠の安らぎを与えられて「休むことができる」のです。

(3) 黙示 14:13c;

13節の結びの言葉は、「彼らの行ないは彼らについて行くからである」という言葉です。

ここで言う「彼らの行ない(erga)」とは、「良い行ない」のことです。私達人間は「良い行ない」をするために造られた神の作品なのです。聖書はこう告げています；「私達は神の作品であって、良い行ない(erga)をするために、キリスト・イエスにあって造られたのです」(エペソ 2:10)。

「作品」と訳されたギリシャ語は「ポイエーマ(poie \bar{m} a)」という言葉で、英語の「ポエム(poem)」の語源となった言葉です。ですから、「私達は神の作品である」という聖書の言葉は「私達は神が作って下さった詩でありポエムである」と言い直しても良いのです。東洋思想研究家で陽明学者の安岡正篤氏は、「人生は一篇の詩である」と言い、こう言いました；「人生は創作であり一篇の詩である。人生に於ける起承転結はむずかしい」。人生という「一篇の詩」、その起承転結の「結」が人生の幕を降ろす時であります。その人生最後を締めくくる「結」、即ち「死」をどのように迎えるか…これは実に「むずかしい」のであります。

けれども、心配することはありません。私達の人生という詩・ポエムには素晴らしい作者・詩人がいるからです。その作者とは永遠なる神です。神が私達を造り、人生というポエムを与えて下さったのです。そうだとすれば、私達の人生というポエムの「結」もまた、作者である神が最善になして下さる筈なのです。そのことを信じるなら、全てを神に委ねて地上に別れを告げて「天の御国」へと希望を抱いて旅立つことができるのです。

「私達は神の作品である」と聖書は告げています。そうなのです、あなたも「神の作品」なのです。作品には作者の思いが込められています。そして、あなたという作品の作者である神は、あなたが「良い行ないをする」ことを願ってあなたをお造りになったのです。

ですから、「神の作品」であるあなたには、「良い行ないをする」という任務と責任があるのです。神が私達に命じている「良い行ない」とは、キリストが生涯

を賭けて教えたこと、即ち「神を愛し、人を愛せよ！」という「愛の戒め」を実践することにあります。あなたが行なう「良い行ない」と「愛のわざ」は、あなたが死んだ後もなお、「あなたについて行く」のであります。

私達はいつか地上の人生に別れを告げねばなりません。しかし、神は永遠であり、神の愛は真実の愛・まことの愛です。聖書はこう告げます；「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」(1コリント 13:33)。永遠なる神に繋がって、愛である主にあって為された愛の労苦は「いつまでも残る」のです。それは決して消え去りはしません。愛によって為される「行ない」は不滅であり、「その労苦は決して無駄にはならないのです」(Iコリント 15:58)。

「永眠者名簿」に名前を記された人達が地上で行なった「労苦も決して無駄にはならない」のです。そして、彼らの労苦に感謝し彼らの志を受け継いで生きることが、後に残された者が果たすべき務めなのです。

【結び】永遠の御国で；

「神は人の心に永遠への思いを与えられた」(伝道 3:11)。「召天者記念礼拝」のこの日、私達は「永遠への思い」をもって、「主にあって死んだ」人たちを偲びつつ、永遠なる神を礼拝しています。その私達にも、いつか「死ぬ日、定めの時」がやって来ます。しかし、その日は同時に「幸いな日」でもあるのだということを忘れないでおきましょう。なぜなら、その日は「永遠」への旅立ちの日だからであり、先に「天に召された人達」と「永遠の御国で」再会できる日でもあるからです。

「草は枯れ、花はしぼむ。まことに人は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。」(イザヤ 40:7-8)と聖書は告げます。私達は野の草のように「枯れて、しぼみ」、「私達の外なる人は日々衰えて行きます」。しかし、神は永遠であり不滅です。そのお方がこう仰るのです；「今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである」…ヨハネの黙示録 14 章 13 節。

この御言葉のように、先に召された方達が、地上での「労苦から解き放されて休んでいる」ことを信じましょう。そして「永遠の御国で」永遠の愛に包まれていることを、私達もいつかその「永遠の御国」へ行くのだということを、そして愛する人たちと再会できるのだということを、信じましょう。「この希望は失望に

終わることはありません！」(ローマ 5:5)。そして、「良いことをするために造られた神の作品」として、与えられている地上の人生を「永遠の御国」を仰ぎつつ、「信仰と希望と愛」(1 コリント 13:13)を抱いて歩んで行きましょう。◇